

大学初年次に実施される補完英語教育の成果と課題

市川 美穂・飯塚 登世一

概要

本稿の目的は、鳥根大学において1年次前期の選択科目として開講される補完英語授業「スタートアップ・イングリッシュ」の成果と課題について明らかにし、今後の大学における補完英語授業のあり方を探ることである。英語が苦手な学生を対象にしている「スタートアップ・イングリッシュ」の受講者の英語必修4科目の単位修得状況を調査した結果、スタートアップ・イングリッシュと同じ1年次前期に履修する「英語ⅠA」の両方の単位が修得できた学生は、その他の必修3科目の単位修得もできる傾向にあった。一方で、「スタートアップ・イングリッシュ」の単位を修得できなかった学生は、その他の必修4科目の単位修得もできない傾向にあった。この結果をもとに、今後の大学初年次における補完英語教育の授業あり方や課題について論じる。

キーワード：補完英語教育、学び直し大学英語教育、英語リメディアル教育

0. はじめに

文部科学省の『令和5年度学校基本調査』（文部科学省, 2023）によると、2023年度の大学進学率は57.7%であり、大学の全入時代は、同時に大学のユニバーサル化にも拍車をかけている。近年の変化として大学受験が早期化の傾向にあり、いわゆる推薦入試（学校推薦型選抜と総合型選抜）の割合が増えているという（朝日新聞 b, 2023）。鳥根大学においても2021年から総合選抜型推薦試験「へるん入試」が始まり、大学共通テストを課さない受験方法で入学する学生が年々増えており、2023年度では全体の25%、つまり4人に1人は「へるん入試」による入学者であった（朝日新聞 a, 2023）。「へるん入試」の入学者は今後もさらに増える見込みである。こうした学力検査を課さない入試方法で入学する学生の学力低下はいうまでもなく、学習意欲の低下やそれまでの学習習慣の有無においても入学の時点で大きく異なっており、入学後に修得すべき英語必修科目の単位修得にも大きく影響を及ぼしている。

筆者は2022年度より鳥根大学の補完英語教育の授業である「スタートアップ・イングリッシュ」を担当しているが、一定数、かなり英語力の低い学生がいるのは事実である。しかしながら、近年の学生の実態として、履修登録をしても一度も授業に来ない、最後まで履修を続けることを簡単に諦めてしまう、その後もただ同じ科目の再履修を繰り返す、その他の英語必修科目も次々と単位を落とす、メッセージを送っても返事がない・連絡が取れない、といった英語力以外の問題を抱える学生が増えており、教員の創意工夫や努力だけでは立ち行かなくなっている。したがって、単に足りない学力を補うための補完授業を実施するだけでは不十分であり、結果的に何年経っても単位修得に至らない学生が増える一方である。

本稿では、まず、大学における補完教育について概観し、島根大学において2023年度前期に実施した補完英語教育「スタートアップ・イングリッシュ」の受講者の単位修得結果が、その他の英語必修4科目の単位修得結果とどのくらい関連が見られるか、また、推薦入試「へるん」による影響がどのくらい見られるのかを明らかにする。そして、この結果をもとに、大学初年次前期に実施される補完英語教育のあり方と今後の課題について論じる。尚、本稿は、今、学生に何が起きているのか、全体像を掴むための調査・研究であり、「スタートアップ・イングリッシュ」受講者への聞き取りやアンケートといった学生側の視点は含まれていない。今後も継続的に調査・研究を続けていくこと、そして、今回得られた結果を今後の自身の講義や学生支援に活かしていくことを目的とする。

1. 大学における補完教育

1.1 補完教育とは

中央教育審議会答申「学士課程教育の在り方に関する小委員会第6回議事録」第3章「改革の具体的な方策」にある第2項「初年次における教育上の配慮、高大連携」のなかで、平成17年（2005年）の段階でおよそ3割の大学で補習・補完授業が実施されているという報告がある（中央教育審議会答申, 2008）。それから20年が経過した現在、さらに多くの大学において学生の学力を補習・補完するための授業やプログラムが実施されていると考えられ、こうした補完的教育をなくして、もはや立ち行かない大学も多いのではないかと推測される。

また、同答申（2008）のなかでは、大学において実施される補習教育＝「リメディアル教育」という用語が使われ、これ以降、答申や各種論文において「リメディアル」や「リメディアル教育」という言葉が多く使用されるようになった。しかしながら、浅野（2013）は、何を指導することが「リメディアル」なのかという議論が十分されないまま、あたかも高校の学習内容の「補習・補完」と同義で使用されていることに疑問を呈しており、まずは「リメディアル教育」とは何であるのかを理解しておく必要がある。

1.2 リメディアル教育とは

リメディアル教育の定義を、山岡（2012）は「入学者の学力低下に伴い専門教育の推進が困難である現状において、高校卒業までに習得すべき学習内容の補習授業」とであると述べているように、一般的に大学におけるリメディアル教育とは、主に学生の足りない学力を補習するための教育を指すことが多い。しかし浅野（2013）は、研究者の間でも「リメディアル」という語の使われ方においてバラエティーが出ていることを指摘し、こういったカタカナ表記の言葉が「いかに本質を見えにくくしているか」について言及している。

さらに近年の研究において、日本リメディアル教育学会は「リメディアル教育」という概念の定義は、以下の2つだと述べている。

- (1) 「リメディアル教育」＝「学習・学修支援」

(2) 大学院生を含む高等教育機関に学ぶ全ての学生と入学を予定している高校生や学習者に対して、必要に応じてカレッジワークに係る支援を高等教育機関側が組織的・個別に提供する営み、またその科目・プログラム・サービスの総称

(日本リメディアル教育学会, 2019)

以上のことから、「リメディアル教育」が単なる高校の学習内容の補習授業をすることではないことは明らかである。このように「リメディアル教育」という用語の定義が変わってきたこと背景には、学生の学力低下だけが問題ではなく、学生の多様化の問題もそこには含まれていることを示唆している。

奥羽 (2013) は、平成 23 年度 (2011 年)、自身が担当した再履修クラスを受講した学生へ履修理由を尋ねるアンケート調査を実施したが、その結果を筆者が学力に関するものと、そうでないものに分類したものが表 1 である。

表 1 再履修クラス履修理由 (奥羽, 2013)

学力に関する理由	それ以外の理由
<ul style="list-style-type: none"> ・学力不足 (授業が全然理解できなかった、期末試験ができなかった) ・英語の勉強の仕方がわからない 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習怠惰 (勉強をしなかった、すればできた) ・欠席超過 (4回以上欠席により未修) ・授業への不適応 ・大学自体への長期欠席 (病気や家庭の事情等) ・履修登録忘れ ・授業が嫌だったから (担当教員が嫌いだから)

表 1 が示すように、再履修になる学生の抱える問題は単に学力に関するものだけでなく、それ以外の問題も抱えており、さらに、その両方の問題を抱えている学生がいることを示唆している。奥羽 (2013) も、英語の学力そのものは高くても再履修クラスを受講している学生が存在していることに言及し、「学力の多様化が存在している」と指摘しており、学習怠惰や欠席超過がそのよい例である。また、同著は、一定数、「英語の基礎学力が極めて低すぎるにより大学英語の入門レベルにさえ到達していないが故に何年越しでも受講している学生の存在」についても指摘している。この奥羽 (2013) の研究からすでに 10 年以上が経過しているが、学力を問わない入試方法で入学してくる学生が増え続ける限り、必修科目の単位を修得できない学生も増え続けていくと考えられる。したがって、学生の学習・学修面における支援と同時に、それ以外の理由で単位を修得することができない学生へどのような支援ができるのかについても考えていかなければならない。尚、本稿では、「リメディアル教育」という用語ではなく、「補完教育」という言葉を選んで使用する。その理由として、定義や使われ方が曖昧な用語の使用を避けるため、そして、島根大学において令和 4 年 (2022 年) まで実施されていた別の補完英語教育に「英語リメディアル」という名称が使用されていたことから、混同しないためである。

1.3 島根大学における英語の正規必修科目と補完科目

筆者が勤務する島根大学では、全学共通教育における外国語教育は島根大学外国語教育センターが担当している。外国語教育センターで実施される英語教育プログラムの特徴として、各レベルにおいて共通のシラバスと共通のテキストを用いて授業が行われていることが挙げられる。表2に示すように、2023年度までの入学者には英語の基礎科目として合計4単位を必修科目としている¹。

1年次前期に履修する必修科目「英語ⅠA」は、4月入学時に実施されるTOEIC Bridge[®] Listening & Reading IPテスト²の結果をもとに習熟度別クラスに編成され、3つのレベル（基礎・標準・上級）に分かれて実施された。例えば基礎レベルでは、主として英語4技能（読む、書く、聞く、話す）の基礎力の充実を図ることを目標としている。具体的にはどのレベルもTOEICについて学びながら、英語の知識や技能を身につけることを目的とし、自学自習を中心とした英語の学習方法についても学ぶ。

「英語ⅠA」と同じく1年次前期に実施される「スタートアップ・イングリッシュ」は、教養育成科目（入門科目）であり、現在、唯一の補完英語教育である。1年次前期のみの開講で、2021年度より単位化された。履修対象者はTOEIC Bridge[®] Listening & Reading IPテストの得点が50点以下の学生で、外国語教育センターで履修対象者を選び、人数調整が行われるため、いわゆる誰でも選択履修できる「選択科目」とは異なる。まずは対象の学生に説明会へ参加するよう案内し、説明会に参加した後、最終的に履修するかどうかは学生が判断する。

表2 2023年度の島根大学外国語教育センター英語教育プログラム

学年・学期	授業科目名	単位数	備考
1年・前期	英語ⅠA（必修）	1単位	共通科目として習熟度別クラス編成（基礎・標準・上級レベル）でTOEICを学ぶ
1年・前期	スタートアップ・イングリッシュ A,B,C,D（選択）	1単位	英語が苦手な1年生のみが履修できる教養育成科目（入門科目）
1年・後期	英語ⅠB（必修）	1単位	習熟度別クラス編成（基礎・標準・上級レベル）で英語を読む力、書く力の向上に重点を置くクラス
1年・後期	英語ⅡA（必修）	1単位	習熟度別クラス編成（基礎・標準・上級レベル）で英語を聞く力、話す力の向上に重点を置くクラス
2年・前期	英語ⅡB（必修）	1単位	習熟度別クラス編成（基礎・標準・上級レベル）で英語4技能を総合的に発展させるクラス

1年次後期の正規の必修科目である「英語ⅠB」と「英語ⅡA」の習熟度別クラス編成は、前期の「英語ⅠA」の期末試験として実施されるTOEIC[®] Listening & Reading IPテストのスコアと、8月上旬に実施される「習熟度別レベル希望調査」に基づいて決められる。そ

¹ ただし、2023年度から先行して材料エネルギー学部のみ英語必修科目は6科目合計6単位になり、2024年度にはそれ以外の学部においても5科目合計6単位となった。

² TOEIC Bridge[®] Listening & Readingテストは、初中級者の英語2技能ListeningとReadingを測定するマークシートによる一斉客観テストで、リスニング15～50点とリーディング15～50点の合計30～100点で構成される。

して、「英語ⅠB」は Reading と Writing 技能に重点が置かれ、「英語ⅡA」は Listening と Speaking 技能に重点が置かれることから、両方で基礎的な英語総合力を身につけることを目的としており、補完的な授業として位置付けられている。

2 年次前期の正規の必修科目「英語ⅡB」は、英語の 4 技能 (Reading, Writing, Listening, Speaking) をさらに向上させ、今後の英語学習に必要な英語総合力を身につけることを目的としている。英語ⅠA (Listening, Reading)、英語ⅠB (Reading, Writing)、英語ⅠA (Listening, Speaking) の授業で培ってきた能力をさらに強化・補完すべく、3 つの科目の総まとめとして位置付けられている。

実は令和 4 年 (2022 年) まで、別の補完英語教育も行われており、1 年次後期に「英語リメディアル」という名称で実施されていた。1 年次前期「スタートアップ・イングリッシュ」の後継の補完教育として位置づけられ、必修科目「英語ⅠB」及び「英語ⅡA」の履修に不安を感じる英語基礎力の不足している学生を対象としていた。「スタートアップ・イングリッシュ」とは異なり、正課外の授業として開講していたため、単位認定はなかった。このプログラムが開かれなくなった理由として、そもそも参加者が少なかったこと、そして、想定していた「英語基礎学力の不足している学生」の参加がほとんどなかったことが挙げられる。実際、この授業には標準や上級レベルの学生も参加しており、本来の補完教育プログラムの主旨とは異なるものになってしまったことが終了の主な理由であった。

2. 島根大学における補完英語教育の概要とその実際

2.1 概要

筆者が勤務する島根大学外国語教育センターでは、1 年次前期、英語が苦手な学生向けの補完英語教育「スタートアップ・イングリッシュ (以下、SE)」を開講している。授業は週 1 回 1 コマ (100 分) 15 回、学生の履修科目の関係で月曜及び火曜 9・10 時限 (16:50 ~ 18:30) で行われている。A ~ D の 4 つのクラスに分かれ、4 名の教員が担当している。共通のシラバスを使い、テキストは使用せずプリント教材を使用する。また、予習課題は課されない。

授業の目的は以下のとおりである。

本授業は、英語学習に困難や不安を抱える学生を対象にして、その困難や不安を克服するために必要な英語の基本語彙や文法基礎力を身につけるとともに、正規の英語必修科目の授業にしっかりと対応していけるように、英語学習に対して積極的に取り組む姿勢を培います。³

(下線部は筆者による)

とりわけ、同じ 1 年次前期に履修する「英語ⅠA」(必修科目) に対応していけるように学

³ 島根大学シラバス 2023 年度

https://gkm2019-sy.shimane-u.ac.jp/syllabusHtml/2023/90/90_E0A6931_ja_JP.html

習・修学をサポートする補完教育としての役割もある。

2023年度の履修対象者はTOEIC Bridge[®] Listening & Reading IP テストの成績が30～50点の88名（以下、括弧内はへるん入試による入学者数：62名）で、3名が履修しなかったため最終的な履修者は85名（へるん：60名）だった。学部ごとの内訳は、法文学部10名（へるん：9名）、教育学部7名（へるん：1名）、総合理工学部45名（へるん：33名）、生物資源21名（へるん：16名）、材料エネルギー5名（へるん：3名）であった。

以下の表3は、2023年度に実施した15回の授業内容である。初回のオリエンテーションを除いて全て面接授業で実施された。この授業で学習する内容は単にこの科目の単位を修得するためでなく、正規の英語必修4科目を学ぶ上でも欠かせない基本的な文法知識を中心としていた。

表3 2023年度「スタートアップ・イングリッシュ」授業内容

1. オリエンテーション	9. 前半まとめ・中間試験
2. Unit 1 主語と述語動詞	10. Unit 8 時制と相
3. Unit 2 基本の5文型（その1）	11. Unit 9 名詞節
4. Unit 3 基本の5文型（その2）	12. Unit 10 関係代名詞
5. Unit 4 修飾語	13. Unit 11 関係副詞
6. Unit 5 to 不定詞	14. Unit 12 副詞節
7. Unit 6 動名詞	15. 期末試験
8. Unit 7 分詞	

2.2 授業の実際

毎回の授業は基本的に2つのパートに分かれる。表2が示すように、授業の前半は各Unitの文法項目についてプリント教材を使って学習し、英語の成り立ちや基本文型などの基本構造を学ぶ。その後、確認テストを行う。後半（およそ30分）は、「英語I A」の授業で行われるテスト対策をする。授業内で扱う演習問題及び確認テスト、また英語I Aのテスト対策もすべてオンライン上で問題が解けるようになっている。更に、英語I Aのテスト対策においては、受講者が授業外でもオンライン上の問題にアクセスし、繰り返し復習できるようになっている。1クラス30名ほど在籍する英語I Aと比べると、SEは各クラス20～25名と少なく、また、全員が英語の苦手な学生であるという安心感があり、落ち着いて学習ができる環境であった。ただし、受講者間において英語の基礎力には差が見られ、個々の学習スピードが大きく異なるのが毎回の授業の悩みであった。前半の文法項目の学習に時間を割きすぎると、後半の英語I Aのテスト対策の時間が大幅に削られてしまい、どちらかというところを目的に参加していた学生にとっては不満が残る授業となってしまうのが問題であった。また、筆者は、SEを受講しているからといって授業外で何もしなくてよいというものではないことを毎回の授業で伝え、何をどのように学習すればいいのかを具体的に指導するように心掛けていた。その他、英語I Aの授業に対応していくための具体的な支援として、例えば、語彙学習に必要なツールへのアクセス方法の再確認、授業後の学習相談や個別の質問に応じる、欠席した受講者へフォローとしてメッセージを

送る等があった。したがって、SEは、単に英語基礎学力の補完教育としてだけでなく、受講者が自立的に学習する姿勢を身に付け、正規の英語必修科目でも対応していけるように授業外ですべき学習についても広く支援しており、その両方が重要な目的となっている。

3. 分析

3.1 分析の方法

2023年度のSEの履修者85名（その内、へるん入学者60名）の単位修得結果と、正規の必修4科目の単位修得結果を比較し、そこにどれくらいの関係性が見られるのか、さらに、どれくらい推薦入試「へるん」の影響が見られるのかを調査する。まず、1年次前期に履修する2つの科目、SEと英語I Aの単位修得結果を見ていく。次に、SEの受講者のその他の正規の必修3科目（英語I B：1年次後期）、（英語II A：1年次後期）、（英語II B：2年次前期）の単位修得結果の関係性を見ていく。最後に、SEの履修対象者だったにもかかわらず、履修をしなかった3名の単位修得結果を追跡調査し、補完教育としての成果と今後の課題について考察する。

3.2 スタートアップ・イングリッシュと英語I Aの単位修得結果の関係性

図1は2023年度のSE受講者85名のSEと英語I Aの評点⁴分布を表している。SEの単位修得に至らなかったのは85名中10名（その内、へるん7名）で、英語I Aの単位修得に至らなかったのは23名（その内、へるん17名）であった。

図1 SEと英語I Aの評点分布図 (N=85)

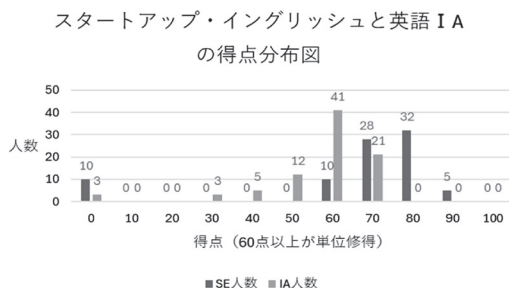


図2 SEと英語I Aの評点の相関

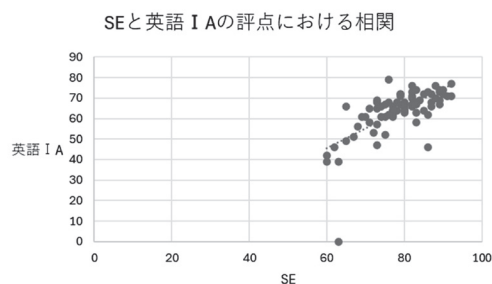


図2はSEと英語I Aの評点の相関を表している。2つの科目の相関係数は0.67で、正の相関が見られた。

さらに、以下の5つの結果に着目して見ていく。

① SEと英語I Aの両方の単位を修得できた 60名

⁴ 評点は成績評価の基準に基づいて算出される。それぞれの科目の評価基準は、スタートアップ・イングリッシュ：授業への参加度（9点）、確認テスト（12点）、中間テスト（25点）、期末試験（30点）。英語I A：予習課題（11点）、小テスト（32点）、まとめテスト（22点）、期末試験[TOEIC[®] Listening & Reading IPテスト]（35点）。

- ② SE と英語 I A の両方の単位を修得できなかった 8 名
- ③ SE のみ単位が修得できた 14 名
- ④ SE を未修にした 10 名
- ⑤ SE を未修にしたが、英語 I A の単位を修得できた 2 名

① SE と英語 I A の両方の単位を修得できた 60 名

SE 受講者 85 名中 60 名（その内、42 名がへるん）、つまり 70% 以上が SE と英語 I の両方の単位を修得できた。SE には予習課題がないとはいえ、16:50～18:30 という遅い時間から余分に英語の授業を受けなければならず、英語が好きではない・苦手な学生にとっては大きな負担であったであろう。そのことを示すように、SE の単位を落とした 10 名（その内、7 名がへるん）は全員「未修⁵（E）」で、英語 I A の未修 3 名（その内、1 名がへるん）よりも多かった。

② SE と英語 I A の両方の単位を修得できなかった 8 名

SE と英語 I A の両方の単位が修得できなかったのは 85 名中 8 名（その内、6 名がへるん）で、全体の 9% ほどだった。今回の調査で、その 8 名のうち 2 名はすでに退学していることがわかったため、表 4 は残り 6 名の単位修得結果をまとめたものである。図 1 でも示したように、SE の単位が修得できなかった全員は未修だったので、学生 A13 を除いた 5 名は、英語 I A を何とか最後まで履修したものの、合格点の 60 点には満たなかった。

表 4 ②のグループの単位修得結果

		SE_成績	IA(B)_成績
L7	ヘルン	E	38
E7	ヘルン	E	50
S1		E	57
S45	ヘルン	E	58
A13		E	E
A16	ヘルン	E	56

表の得点は評点で、E（未修）と単位修得ができなかったもの（60 点以下）を太字にしている。一番左の列のアルファベットは学部を表し、L= 法文学部、E= 教育学部、S= 総合理工学部、A= 生物資源学部、Z= 材料エネルギー学部である。

③ SE のみ単位が修得できた 14 名

SE のみ単位が修得でき、英語 I A の単位は修得できなかったのは 85 名中 14 名（その内、10 名がへるん）で、全体の 16.5% にあたる。表 5 は、その 14 名の単位修得結果をまとめたものである。例えば、学生 L1 の SE の評点は 86 点と高かったものの、英語 I A は 46 点しかないことが示すように、SE は予習課題がない上に、毎週実施する確認テストは直前で扱った内容であり、学外での学習がほぼ必要ない。その一方で、英語 I A は毎週の予習課題に加えて、前週で扱った学習内容の小テストが実施されることから復習もしなければならない。SE の授業内で英語 I A の小テスト対策をするとはいえ、必ずしも全部の試験範囲

5 島根大学において「不可」とは 100 点満点法による 59 点以下を指し、「未修」とは正当な理由なく 5 回以上授業を欠席し期末試験受験の権利を失った場合や、期末試験を受験しなかった・できなかった場合を指す。

を十分にカバーできるわけではないため、授業外における自主学習が必須となる。授業外での学習が十分ではなかった学生が単位を落としたものと考えられる。

表5 ③のグループの単位修得結果

		SE_成績	IA(B)_成績			SE_成績	IA(B)_成績
L1	ヘルン	86	46	S21	ヘルン	62	46
E4		68	56	S22	ヘルン	60	42
E6		71	58	S29	ヘルン	67	51
S2		83	58	S32	ヘルン	65	49
S4	ヘルン	73	47	S39		63	E
S13	ヘルン	60	39	A5	ヘルン	72	53
S19	ヘルン	73	57	Z4	ヘルン	63	39

④ SE を未修にした 8 名

①でも述べたが、SE を未修にしたのは 85 名中 10 名（その内、7 名がヘルン）で、全体の 11.8% にあたる。10 名中 2 名はすでに退学していたため、表 6 は残り 8 名の単位修得結果をまとめたものである。8 名中 6 名が英語 I A の単位を落とし、その内 4 名がヘルン入試の学生であった。また、学生 A13 は英語 I A も未修にした。一方で、2 名の学生 (S3 と S16) は英語 I A の単位が修得できた。

表6 ④のグループの単位修得結果

		SE_成績	IA(B)_成績			SE_成績	IA(B)_成績
L7	ヘルン	E	38	S16	ヘルン	E	65
E7	ヘルン	E	50	S45	ヘルン	E	58
S1		E	57	A13		E	E
S3		E	61	A16	ヘルン	E	56

⑤ SE は未修だったが、英語 I A の単位を修得できた 2 名

④でも述べたように、SE を未修にした 10 名中 2 名 (S3 と S16) が英語 I A の単位を修得することができた。これは、学生が SE を取らなくても自分で学習できると判断し、履修を取りやめたケースだと考えられる。

3.3 スタートアップ・イングリッシュ受講者のその他必修 3 科目の単位修得結果

この節では、3.2 の 5 つの結果をもとに、SE 受講者 85 名のその他の必修 3 科目（英語 I B、英語 II A、英語 II B）の単位習得結果についても見ていく。

① SE と英語 I A の両方の単位を修得できた 60 名

表 7 グループ①のその他必修 3 科目の単位修得結果

		SE_成績	IA(B)_成績	IB_成績	IIA_成績	IIB_成績	備考			SE_成績	IA(B)_成績	IB_成績	IIA_成績	IIB_成績	備考
L2	ヘルン	82	73	73	75	74		S31	ヘルン	76	79	69	76	81	IB,IIA,IIB 標準
L3	ヘルン	79	67	71	74	66		S33	ヘルン	77	64	51	67	62	
L5	ヘルン	79	72	70	70	77		S34	ヘルン	84	69	67	70	63	
L6	ヘルン	89	69	67	68	68		S36	ヘルン	89	73	74	76	69	
L8	ヘルン	86	73	80	74	72		S37	ヘルン	92	77	72	75	81	IB,IIA,IIB 標準
L9		69	61	58	65	65		S38		77	64	55	E	66	
L10	ヘルン	83	63	65	74	67		S40	ヘルン	73	65	66	71	66	
E1		76	62	65	67	68		S41	ヘルン	78	68	67	67	66	
E2		87	72	73	71	67		S42	ヘルン	73	68	70	67	64	
E3		90	74	80	80	80		S43	ヘルン	83	67	68	73	69	
E5		80	65	67	64	64		S44	ヘルン	88	70	66	64	68	
S5	ヘルン	82	66	70	E	64		A1	ヘルン	80	68	66	74	62	
S7		71	65	52	54	65		A3		89	74	82	83	82	
S8	ヘルン	82	67	69	68	75		A4	ヘルン	77	66	61	67	72	
S9	ヘルン	74	61	62	64	59		A6		87	68	75	74	68	
S10	ヘルン	82	76	69	73	81	IB,IIA,IIB 標準	A8	ヘルン	82	71	72	76	72	
S11		75	61	57	60	E	IB,IIA,IIB 標準	A10	ヘルン	80	64	67	71	62	
S12		78	64	61	65	62		A11	ヘルン	83	68	63	71	62	
S14		82	70	69	67	65		A12	ヘルン	77	61	63	62	62	
S15		65	66	63	69	75		A14	ヘルン	80	67	68	79	68	
S17	ヘルン	75	67	75	68	78		A15	ヘルン	77	62	61	E	54	
S18	ヘルン	70	61	68	69	68		A17	ヘルン	91	71	81	79	70	
S20		79	71	73	66	80	IB,IIA,IIB 標準	A18	ヘルン	74	66	65	67	61	
S23	ヘルン	80	63	67	69	65		A19		85	64	67	67	75	
S24	ヘルン	80	67	E	65	67		A20	ヘルン	90	72	73	71	76	
S25	ヘルン	86	62	67	69	71		A21	ヘルン	85	72	81	69	71	
S26		89	67	71	75	80		Z1	ヘルン	83	74	69	77	75	
S27	ヘルン	79	72	63	63	67		Z2	ヘルン	76	68	68	69	68	
S28	ヘルン	88	76	76	81	76		Z3		87	66	72	76	67	
S30	ヘルン	73	69	46	62	E		Z5		92	71	69	71	68	

表 7 は、SE と英語 I A の両方の単位を修得した 60 名のその他の正規必修 3 科目の単位修得結果をまとめたものである。60 名中 50 名 (83.3%) がその他必修 3 科目の全ての単位も修得できた。60 名の必修 3 科目の成績のなかで未修の数が 6 つしかなかったというのは注目すべき点である。さらに、60 名中 5 名 (S10, S11, S20, S31, S37) は、1 年次後期から標準レベルへ上がっていた。その理由として、学生が「習熟度別レベル希望調査」で標準レベルを希望したこと、もしくは、英語 I A の期末試験として 7 月に受験した TOEIC® Listening & Reading IP テストのスコアが良かったことが挙げられるが、後者の理由が有力であると考えられる。5 名のうち 4 名は 400 点以上のスコアを取り、なかでも S31 は 465 点の高得点を取った。

② SE と英語 I A の両方の単位を修得できなかった 8 名

SE と英語 I A の両方の単位を修得できなかったのは 8 名で、その内 2 名はすでに退学しているため、残り 6 名の単位修得結果を見ていく。表 8 が示すように、S45 を除

き、SEと英語ⅠAの両方の単位を修得できなかったのは学生の傾向として、他の英語必修3科目の単位も落としたということである。必修4科目全ての単位を落としたのは4名(L7,E7,A13,A16)で、特にL7は英語ⅠA以外の3科目は全て未修だった。

表8 グループ②のその他必修3科目の単位修得結果

		SE_成績	IA(B)_成績	IB_成績	IIA_成績	IIB_成績
L7	ヘルン	E	38	E	E	E
E7	ヘルン	E	50	48	45	47
S1		E	57	52	61	67
S45	ヘルン	E	58	68	63	80
A13		E	E	28	35	E
A16	ヘルン	E	56	42	53	E

③ SEのみ単位が修得できた15名

表9は、SEのみ単位が修得できた15名(その内、10名がへるん)のその他の必修3科目の結果をまとめたものである。

表9 グループ③のその他必修3科目の単位修得結果

		SE_成績	IA(B)_成績	IB_成績	IIA_成績	IIB_成績	備考			SE_成績	IA(B)_成績	IB_成績	IIA_成績	IIB_成績	備考
L1	ヘルン	86	46	33	62	53		S21	ヘルン	62	46	42	50	38	
E4		68	56	50	50	E		S22	ヘルン	60	42	E	51	54	
E6		71	58	61	50	E		S29	ヘルン	67	51	E	E	E	
S2		83	58	71	71	69		S32	ヘルン	65	49	63	69	76	
S4	ヘルン	73	47	48	52	未登録	ⅡB履修登録無し	S39		63	E	E	E	未登録	ⅡB履修登録無し
S13	ヘルン	60	39	26	43	35		A5	ヘルン	72	53	56	60	70	
S19	ヘルン	73	57	70	66	71		Z4	ヘルン	63	39	E	E	E	

英語ⅠBの単位を落とした学生は10名、英語ⅡAの単位を落とした学生は9名、英語ⅡBの単位を落とした学生は9名であった。全体の未修の数が12個と多い。また、英語ⅠAの単位を落としただけでなく、その他必修3科目(英語ⅠB,英語ⅡA,英語ⅡB)の全ての単位を落とした学生は8名で、内2名(S29とZ4)はすべて未修だった。しかしながら、3名(S2,S19,S32)の学生は、英語ⅠA以外の3科目(英語ⅠB,英語ⅡA,英語ⅡB)の単位が修得できた。一方で、2年次前期の英語ⅡBの履修登録をしなかった学生が2名(S4とS39)おり、学生S4は必修3科目(英語ⅠA,ⅠB,ⅡA)の全ての単位が取得できず、学生S39は全て未修にした。

④ SEを未修にした10名

SEが未修だった10名の内、2名はすでに退学していたため、表10は残り8名の結果をまとめたものである。8名中4名(L7,E7,A13,A16)は全ての必修科目の単位を落とし、その4名中3名がへるんの学生だった。また、学生A13は英語ⅡBも未修で、英語ⅠBと英語ⅡAの評点が著しく低い。2名の学生(S3とS16)は英語ⅠAの単位は修得できたものの、

学生 S3 は英語 I B の単位を落とし、学生 S16 は英語 I B と英語 II B の 2 つの単位を落とした。一方で、学生 S45 は I A 以外の必修 3 科目の単位全てを修得できた。

表 10 グループ④のその他必修 3 科目の単位修得結果

		SE_成績	IA(B)_成績	IB_成績	IIA_成績	IIB_成績
L7	ヘルン	E	38	E	E	E
E7	ヘルン	E	50	48	45	47
S1		E	57	52	61	67
S3		E	61	58	62	61
S16	ヘルン	E	65	38	61	46
S45	ヘルン	E	58	68	63	80
A13		E	E	28	35	E
A16	ヘルン	E	56	42	53	E

⑤ SE を未修にしたが、英語 I A の単位は修得できた 2 名

④と同じく SE を未修にしたが、英語 I A の単位を修得することができた学生が 2 名 (S3 と S16) いた。恐らく、SE を取らなくても自分で学習できると判断し履修を取りやめたケースだと考えられるが、学生 S3 は 1 科目 (英語 I B) 単位を落とし、学生 S16 は 2 科目 (英語 I B と II B) 単位を落とした。

3.4 スタートアップ・イングリッシュの履修対象者だったが、履修をしなかった 3 名の単位修得結果

表 11 は、SE の履修対象者だったが履修をしなかった 3 名 (内、2 名がへるん) の単位修得結果をまとめたものである。3 名に共通している点として、Listening と Speaking の技能に重点が置かれた英語 II A の単位が修得できたことが挙げられる。

表 11 SE を履修しなかった 3 名の単位習得結果

		SE_成績	IA(B)_成績	IB_成績	IIA_成績	IIB_成績
L4	ヘルン	未登録	44	E	60	62
A2	ヘルン	未登録	67	65	69	66
A9		未登録	E	E	69	E

記録を見ると、学生 2 名 (A2 と A9) は、一度は SE を履修する予定であったことがわかったが、最終的に履修登録をしなかった。学生 A2 は必修 4 科目全ての単位を修得できており、2023 年 7 月に受験した TOEIC® Listening & Reading IP テストのスコアは 305 点であった。恐らく、英語の基礎学力がそこまで低い学生ではなかったと思われ、それ故に履修をしなかったと推測される。一方の学生 A9 は、英語 II A 以外の 3 科目全てが未修だった。学生 L4 は、英語 I A と I B は単位を落としたものの、英語 II A と II B の単位は修得できた。

4. スタートアップ・イングリッシュの成果と課題

本章では、前章で明らかとなった調査結果をもとに、SE の成果と課題について論じる。そこで、何をもって成果とするのかについてだが、まずは受講者が同じ1年次前期に履修する正規の必修科目英語 I A の単位が修得できたかどうか、次に、その他の必修3科目（英語 I B , 英語 II A , 英語 II B）の単位を修得できたかどうかを成果とする。大学初年次前期に実施した SE が補完英語教育として目的を達することができたかどうかは、受講者が単位を修得できたかどうかの結果を見ることで、ある程度、全体的な成果を示すことができると考えた。

4.1 スタートアップ・イングリッシュの成果

2023年度のSE受講者85名中60名（その内、42名がへるん）、70%以上がSEと英語 I の両方の単位を修得できた。さらに、大きな成果として、SE受講者85名中50名（およそ59%）が正規の必修4科目全ての単位が修得できた。この結果が示すように、1年次前期の単位が修得できた学生は、1年次後期からの必修3科目についても概ね単位を修得することができ、且つ、未修にすることが少ないことがわかった。つまり、1年次前期の段階で、大学における英語学習の方法（コツのようなもの）を自分なりに掴み、自立した学習者として授業外での学習に対応していくことができた学生は、たとえ入学時の英語の基礎学力が低くても必修科目の単位を修得していくことができることを示している。SEは、英語の基礎学力の低い学生の足りない知識をただ補完するだけでなく、どのように学習していけば単位修得につながるのか、特に、授業外での学習方法についても具体的に指導したことで、このような結果につながったと考える。

また、SEと英語 I A の両方の単位を修得することができた60名の必修3科目の成績のなかで、未修の数が6つしかなかったというのも大きな成果である。さらに、特筆すべき成果は、SEと英語 I A の両方の単位を修得することができた60名中の5名（その内、へるん3名）は、1年次後期から標準レベルへ上がっていたことである。1年次前期の2023年7月に実施した TOEIC® Listening & Reading IP テストの結果、その5名は420点、400点、430点、465点、390点と基礎レベルとしては高得点を取った。この結果がどの程度、SEを受講したことと関係しているかは定かではないが、入学時に基礎学力の低い学生が、前期のSEと英語 I Aを受講した後で大幅に英語力を伸ばすことができたというのは、教員として嬉しい誤算であったといえる。

4.2 スタートアップ・イングリッシュの課題

2023年度のSE受講者85名中60名（全体の70%以上）が推薦入試へるんの学生だったことから、いかに学力を課さない方法で入学する学生の学力低下が深刻なのかを表している。SEと英語 I Aの両方の単位を修得できなかった6名中4名がへるん入試の学生であった。

SEのみ単位が修得できたのは15名だったが、これはSEが予習課題や小テストのための

復習など授業外における学習が必要ないからであり、一方の英語 I Aはそういった授業外の学習が必須であったため単位が修得できなかったと考えられる。15名中10名がへるん入試の学生であったことから、英語の基礎学力の問題だけでなく、学習習慣の有無も単位修得に大きく影響していることを示している。英語 I Aの単位を落としてしまうと、その他の必修3科目（英語 I B, 英語 II A, 英語 II B）の単位修得もできず、全ての単位を落とした学生は8名もいたこと、その8名中2名は必修科目を全て未修にしたことも明らかとなった。最も深刻なのは、このようなSEと英語 I Aの両方の単位を修得できなかった6名である。このような学生は1つを未修にすると他の科目も次々と未修にしてしまう傾向があり、再履修をただ繰り返すことになると予想される。再履修を繰り返す学生の問題として、まず英語の基礎学力が極めて低いということが根底にあるのだが、加えて学習習慣がなく、授業外でほとんど学習をしないため、結果的にいくら再履修をしても単位取得につながらないのである。再履修を繰り返す学生を減らすためにも、できるだけSEを履修してもらうことが重要なのだが、入学してすぐに実施するTOEIC Bridge[®] Listening & Reading IPテストの結果だけを見て履修対象者を絞るのは非常に難しいという問題がある。現在、50点以下の学生を履修対象として人数調整をしているが、51点の学生は履修しなくてもいいのかといえば、決してそうではない。そして、今後、さらに基礎学力の低い学生が増えた場合、必修科目のレベルを下げる、SEのクラスを増やすなどの対応が必要になってくる。

5. おわりに

本稿では、まず、大学における補完教育について概観し、リメディアル教育という言葉の定義や使われ方の変遷について述べた。その背景には学生の学力低下だけが問題ではなく、学生の多様化に加えて、学力の多様化があり、リメディアル教育が単なる高校の学習内容の「補修・補完」ではないことについて説明した。次に、2023年度の島根大学における英語教育プログラム全体について、さらに、補完英語教育「スタートアップ・イングリッシュ」について、その概要と授業の実際について述べた。続いて、2023年度前期に実施したスタートアップ・イングリッシュ受講者の、正規の英語必修4科目の単位修得結果を分析し、どのくらい推薦入試「へるん」による影響が見られるのかを明らかにした。その結果、スタートアップ・イングリッシュ受講者のおよそ70%以上が英語 I Aの単位を修得でき、さらに英語 I Aの単位を修得できた学生の83%以上がその他の必修3科目の単位も修得できた。したがって、スタートアップ・イングリッシュが、大学初年次前期における補完教育としての目的を概ね達成し成果があったと考えられる。一方で、スタートアップ・イングリッシュ受講者の70%以上が推薦入試へるんの学生であったことから、学力を課さない方法で入学する学生の学力低下は深刻であることも明らかとなった。また、受講者のおよそ9%がスタートアップ・イングリッシュと英語 I Aの両方の単位が修得できず、およそ25%はスタートアップ・イングリッシュの単位は修得できたものの、英語 I Aの単位修得には至らなかった。なかでも、スタートアップ・イングリッシュを未修にした8名の内、4名は必修科目全ての単位を落としており、4名の内3名はへるんの学生であった。

今回の調査では、自分が担当したクラスだけでなく、スタートアップ・イングリッシュ受講者全体の単位修得状況を確認し、改めてその成果と課題について考察した。この結果を、今後の自身の講義や学生支援に活かしていきたい。

参考文献

浅野享三 .(2013).「学び直し大学初年次英語とその授業」『南山大学アカデミア . 文学・語学編 (93)』 2013 年 1 月 ,121-149.

朝日新聞 a. EduA. (2023).「大学入試のゆくえ 島根大の総合型選抜「へるん入試」、導入 3 年の現状を大学が分析 入学後の成績は他選抜と同水準 2023 年 3 月 13 日」(2024 年 9 月 13 日検索)

<https://www.asahi.com/edua/article/14857354>

朝日新聞 b. Think キャンパス . (2023).「知っておきたい！多様化する受験方法とスケジュール 2023 年 4 月 20 日」(2024 年 9 月 13 日検索) .

<https://www.asahi.com/thinkcampus/article100327/?msockid=12ba6934af5368f20fe97a64ae0e6905>

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 . 「TOEIC Bridge® Tests とは」(2024 年 12 月 26 日検索)

<https://www.iibc-global.org/toEIC/pr/bridge4skills/about.html#>

奥羽充規 . (2013).「島根大学一般教育英語再履修クラスにおける効果的授業実践方法－英語リメディアル教育の視点から－」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第 8 号 , 2013 年 3 月 ,15-33.

島根大学外国語教育センター . (2023).「2023 年度 島根大学英語教育プログラム」

島根大学 . (2023).「島根大学シラバス 2023 年度」 . (2024 年 12 月 28 日検索) .

https://gkm2019-sy.shimane-u.ac.jp/syllabusHtml/2023/90/90_E0A6931_ja_JP.html

中央教育審議会 . 答申 . 学士課程教育の在り方に関する小委員会 (第 6 回) 議事録・配布資料 . 資料 8-1. 第 3 章 改革の具体的な方策 . (2025 年 1 月 12 日検索)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/018/gijiroku/08022508/002/004.htm

日本リメディアル教育学会 . (2019). <http://www.jade-web.org/guidance/definition.html>

(2025 年 1 月 11 日検索) .

文部科学省 . (2006). 大学教育部会 (第 8 回) 議事録・配付資料 . (2025 年 1 月 12 日検索)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/gijiroku/07012325.htm

文部科学省 . (2023).「学校基本調査－令和 5 年度 結果の概要－」(2024 年 9 月 13 日検索)

https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/2023.htm

ベネッセ教育総合研究所 . (2007).「国立大学でも「補習授業」、なぜ!？」(2025 年 1 月 12 日検索)

<https://benesse.jp/kyouiku/200705/20070524-2.html>

山岡華菜子 . (2012).「英語リメディアル教育でのオーセンティック教材の使用」 . 『リメディアル教育研究』第 7 巻第 1 号 , 165-175.